

読む会が今月から毎月開催となったため、初めての奇数月例会となりました。また、昨年4月から読み始めた岩波文庫本「太平記」の第1冊も今回の第8巻で読了です。もう、1冊終わりか、まだ、あと5冊かと、感じ方は様々でしょうが、間隔が縮まった分、物語への親しみが増すのではないのでしょうか。動乱の展開も早まり、間もなく第一のヤマ場です。この日は、次のページを読み終えました。

(一) 摩耶軍(いくさ)の事

赤松勢、摩耶攻めの六波羅軍を撃破 (p371~3)

六波羅は赤松の前線基地、摩耶城を叩き潰そうと五千余騎を派兵した。赤松円心は敵を険しい摩耶山におびき寄せ、難所にさしかかったところへ弓射を浴びせて退けた。六波羅軍は、赤松軍を小勢とみて、悔った。

(二) 三月十二日赤松京都に寄する事

赤松勢、西国街道を攻め上る (p378~380)

六波羅は赤松の進撃を抑えようと援軍を繰り出した。その大軍にひるまず、赤松勢は、酒部(尼崎市)、瀬川(箕面市)、小屋野寺(昆陽寺、伊丹市)、宿河原(茨木市)と攻め上り、元弘3年(1333)3月12日には、京都南郊に踏み込んだ。驚いた六波羅は、専属指揮官の隅田・高橋両検断に在京の兵力2万余騎を与えて防衛出動を命じ、桂川を挟んで赤松勢3千余騎と向かい合った。赤松円心の三男、則祐が雪解けで増水する桂川を押渡つたのを皮切りに、後続の渡河兵が続々六波羅勢に切り込み、戦火はついに京中に及ぶ。

※宿河原の「ぼろぼろ」 吉田兼好が宿河原で「ぼろぼろ」と呼ばれる乞食法師の果し合いがあった事を伝えている(第115段)。各地の「ぼろぼろ」がここに集まって念仏を唱えていると、師の仇を探している東国の法師が現れ素志を告げた。仇に当たる人物が名乗り出たので、二人は少し離れたところで決闘し、共に果てた。赤松勢がここに陣を取ったのは、このようなあぶれ者を戦力に取り込もうとしたのかも知れない。

※京攻め赤松軍の構成 円心の息子の範資、貞範、則祐の三兄弟が先頭に立ち獅子奮迅の活躍。これに、播磨国佐用郡を本拠とする赤松一族の宇野、佐用、上月、小寺各氏が従う。さらに、坂越の飽間氏ら、播磨、備前、美作など周辺国の知縁の武士、太山寺衆徒など大塔宮の令旨で参戦した勢力が加わった混成軍。

(四) 主上両上皇六波羅臨幸の事

光厳帝らの皇族が避難 (384~386)

京中が物騒になり、光厳天皇は六波羅に避難。上皇、法皇、東宮、法親王らもこれにならった。

(五) 同じき十二日合戦の事 (p390~394)

京中合戦に持ち込んだ赤松勢だが、新たに投入された伊予の豪族河野氏や備中武士陶山氏らの強豪に阻まれて苦戦、勇猛な則祐まで命からがら逃げ延びる始末。軍勢立て直しのため、後方陣地の山崎に引き返した。河野、陶山に功を奪われたかたちの隅田、高橋は、手当たり次第にかき集めた首を六条河原に懸けて、手柄を誇ろうとした。赤松円心と付け札した首が五つもあったので「首を借りた人は、利子を付けて返すべし」と、京童部の嘲笑を買った。

(七) 西岡合戦の事

後醍醐皇子と偽って奉じ戦う (396~400)

赤松軍は苦境を打開するため、いろいろな手を打つ。大塔宮指揮下の中院貞能(定平)を後醍醐第四皇子聖護院宮と偽ってかつぎ、士気を高揚、淀川水運を差し止めて洛中への物流を阻止、野伏によるゲリラ作戦などだ。六波羅の油断もあって、桂川西岸を中心とする戦いで、赤松軍は少し勢いを持ち直した。

(九) 四月三日京軍の事

両軍、兵力を増強して対決 (p407~410)

京都南郊の主要街道で、両軍激突。雌雄つかず。

(十三) 千種殿軍の事

六波羅勢奮戦し千種軍敗退 (p419~429)

船上山を出陣し、山陰道の軍勢を引き入れながら京都に攻め込んだ千種忠顕も、六波羅軍の懸命の防衛を崩せず、八幡に退く。児島高德は弱腰だと激怒。

第10巻輪読予定ページ (8月19日)

- 1) 99さる程に~102下知せられける。
- 2) 103義貞、義助~106なりにけり。
- 3) 108同じき九日~112明るるを期す。
- 4) 116さる程に~118山内へ引つ返す。
- 5) 120さる程に~124見えざりけり。
- 6) 127極楽寺へ~130心を迷はせり。
- 7) 142安東左衛門~146臥したりける。
- 8) 146諏訪左衛門~148参りける。
- 9) 148御局、盛高~151落ちられける。
- 10) 156長崎、大音声を~
159殿の前に閣く。
- 11) 159長崎入道~161得たりけり。